



# 中学生の対人関係改善に向けた教育的実践に関する研究－学校行事と教師による支援の可能性－

中川, 優子

---

(Degree)

博士 (教育学)

(Date of Degree)

2018-03-25

(Date of Publication)

2019-03-01

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第7076号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1007076>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



(別紙様式4)

## 論文内容の要旨

氏名 中川優子  
専攻 人間発達  
指導教員氏名 伊藤篤教授

論文題目 (外国語の場合は、その和訳を併記すること。)

中学生の対人関係改善に向けた教育的実践に関する研究 ― 学校行事と教師による支援の可能性 ―

### 論文要旨

#### <背景>

近年、子ども・若者の対人技能や対人関係が大きな課題となっている。粕谷・河村(2006)による先行研究等から、個々の中学生がもつ対人関係の判断・展開の基盤となる「内的作業モデル」と彼らが獲得・遂行する「ソーシャルスキル」は、中学生の対人関係に影響を与えている可能性が示されている。谷口・田中(2004)が小学生と高校生を対象にして実施した研究では、年齢の上昇とともに、学校適応感や絶望感は、「親の養育態度によって影響を受ける時期」から「後(の)ちに形成される新しい対人関係に基づいて再形成(リバイス)される社会的スキルによって影響を受ける時期」へと移行することが明らかにされている。中学生については、谷口・田中(2004)が対象とした小学生と高校生の中間に位置することから、彼らがもつソーシャルスキルには、親の養育態度の影響が残されている可能性も考えられるが、比較的新しい対人関係に基づいて彼らのソーシャルスキルがリバイスされることも予想される。

河村(2008)は、現代の中学生が適切に他者とかわれない原因として、①被受容感・自己効力感の低さ、②自己中心性に起因する合理化、③他者からの評価への不安をあげている。また、関根(1991)は、家庭や学校において、自らの価値観を正しい方法で発信し、それが受け入れられた子どもは、自分が受容された実感をもつことができ、そういった体験の上に、自分が他者を受容することができるかと述べている。さらに、渡邊(2013)は、親からの情緒的な支持や受容的な養育態度は、子どものパーソナリティ、社会性、適応感に良い影響を与えていると述べている。これらから、子どもに対する周囲の大人からの受容的態度は、中学生の行動適応にとっても重要な変数であることがうかがわれる。

以上から、中学生の対人関係を改善することは学校現場にとって重要な課題であり、本研究では、そのための教育的実践のあり方を検討することとした。

#### <目的>

本研究は、中学生の対人関係改善への支援策を考えることを目的としている。<背景>の項で紹介した先行研究の検討を踏まえると、中学生の対人関係の問題を考えるためには、次の2点を明らかにする必要がある。

(1) 親の養育態度、中学生のもつ内的作業モデル及びソーシャルスキル間の関連性

調査(中学校の全学年を対象に質問紙調査を実施した。質問紙では、中学生が認知する幼児期及び学童期における養育者の態度、中学生がその内面にもつ内的作業モデル、学校生活において生徒が級友や集団活動にかかわる上で必要となるソーシャルスキルに関する回答を求めた)を通して、中学生が認知した養育者の態度が彼らの内的作業モデル形成及び彼らのソーシャルスキルに及ぼす影響を明らかにする。<この章は、神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要第8巻第2号「研究論文」に掲載された内容で構成する>

#### 第4章：調査Ⅱ-①(学校行事を通じた仲間どうしのかかわりの変容―中学3年生の場合)

この章では、養育者以外の他者からの影響を直接明らかにするために、中学生にとっては比較的新しい対人関係である「同級生どうしのかかわり」を出発点とし、練習や準備等の様々な場面での対人関係の変化や生徒の行動変容が期待される学校行事に注目し、各行事についての調査―近畿地方にある公立B中学校の3年生を対象に、体育大会・音楽会という学校行事の前・後等に質問紙調査を実施した。質問紙では生徒がもつ他尊感情に関する回答を求めた。また、学校行事を通して、中学生の対人関係の変化を観察した。さらに、学校行事の練習・本番後に振り返りを実施した―を通して仲間とのかかわりによる中学生の変容について、被受容感、他尊感情及びソーシャルスキルに着目して考察する。<この章は、応用教育心理学研究第34巻第1号に掲載予定の内容で構成する>

#### 第5章：調査Ⅱ-②(学校行事を通じた仲間どうしのかかわりの変容―中学1年生の場合)

調査Ⅱ-①とほぼ同様な方法で、近畿地方にある公立B中学校で実施した質問紙調査、行動観察、振り返りの結果から、学校行事がもたらす仲間どうしのかかわりの変容について考察する。

#### 第6章：調査Ⅱ-③(学校行事を通じた仲間どうしのかかわりの変容―中学2年生の場合)

調査Ⅱ-①とほぼ同様な方法で、近畿地方にある公立B中学校で実施した質問紙調査、行動観察、振り返りの結果から、学校行事がもたらす仲間どうしのかかわりの変容について考察する。

#### 第7章：調査Ⅱ-①～③のまとめ：学校行事を通じた中学生の対人関係の変容とそれを促す担任の援助のあり方

第4章～第6章で得られた調査Ⅱ-①～③の結果を整理し、学校行事がもたらす仲間どうしのかかわりの変容及びそれを促したと考えられる教師の援助・介入のあり方について考察する。

#### 第8章：結論・提言と課題

調査Ⅰ及び調査Ⅱ-①～③から得られた知見を基にして、中学生の対人関係改善に向けたソーシャルスキルの獲得を目指した教育的実践のあり方を教師による支援策も含めて論じるとともに、今後の研究課題について整理する。

論文審査の結果の要旨

氏名	中川 優子		
論文題目	中学生の対人関係改善に向けた教育的実践に関する研究 －学校行事と教師による支援の可能性－		
判定	合格 ・ 不合格		
審査委員	区分	職名	氏名
	主査	教授	伊藤 篤
	副査	教授	松岡 広路
	副査	教授	吉田 圭吾
	副査	教授	加藤 佳子
	副査	准教授	齋藤 誠一
要 旨			
<p>本研究は、学位申請者が、中学校教員という教職経験の中で実感してきた子どもの社会性の弱さ（対人関係の結び方の未熟さ）が、学校現場においてなかなか解決しない「いじめ」や「不登校」に結びついているという課題意識から出発し、中学生のソーシャル・スキル促進（対人関係改善）を目指した教育実践を展開するためには、学校行事に向けた練習過程を通して活性化される仲間どうしの相互受容的態度に着目する必要があるという前提で取り組まれた。</p> <p>第1章では、課題意識（研究背景）として、中学生に立ち現れているいじめ・不登校という愁眉の問題を解決すべく、学校のみならず地域からの支援がなされているにもかかわらず、中学生の対人関係の改善が進まないことを示すとともに、一般に幼児期からの養育的態度とそれによって形成される内的作業モデル（対人関係の結び方の下敷き）がソーシャル・スキル（以下SSと略す）と関連すると理論化されているが、それに代わる経路によるSK促進の可能性が有ることを仮説的に提起し、研究目的につなげている。すなわち、学校行事を契機とした仲間どうしの相互受容的態度の促進およびそれを支える教師の介入が中学生のSSの発揮につながることを検証するという目的である。</p> <p>第2章では、本研究で取り上げる構成概念である「養育他度」「内的作業モデル」「SS」と中学生の対人関係との関連に関する先行研究、中学生の対人関係の実態および対人関係改善を目指した取組に関する先行研究をレビューす</p>			

ることを通して、第1章で示した研究目的（仮説）の意義を確認している。

第3章（調査Ⅰ）では、「親の養育態度（＝受容）→内的作業モデル→SS」といった経路が中学生において見られるのかを検討した。その結果、内的作業モデルを媒介する場合は「受容」が「かかわり」というSKに結びつき、媒介しない場合には「受容」が「配慮」というSSに結びつくことが明らかにされ、必ずしも「（内的作業モデル形成の前提としての）親との愛着関係」がなくても、配慮という他者尊重を中心としたSSが導かれる可能性を見出した。

第4章～第6章（調査Ⅱ①～③）では、学位申請者が学級担任として勤務するクラスの生徒（中学1年生・中学2年生・中学3年生/各学年1年ずつ計3年間）を対象に、学校行事（体育大会・音楽会）に向けた練習過程において、毎回の練習後に生徒が記入する「振り返りシート」をデータとして、生徒間がどんなかかわりをしたのか（パフォーマンス改善、内省・反省、他者の受容・モデル化の3分類）、それによってクラスの雰囲気はどうだったのか（ポジティブ、ネガティブの2分類/ポジティブであればSSが十分に機能していると捉えた）を横断的に分析した。その結果、学年が進むにつれて、他者の受容・モデル化とポジティブなクラスの雰囲気との連関が明確になり、他者の受容・モデル化の質も高まる（「他者」が特定の個人ではなくくなっていき、多くの仲間や集団全体に拡張されていく）こと、さらに、他者尊重の量的指標である「他尊感情況度」が3年生のみ学年の初めと学年の終わりとで有意に高くなっていることが明らかにされた。すなわち、相互受容的態度の形成によってSSの発揮が導かれるという経路は、発達のにもたらされる可能性が示唆された。

第7章では、調査Ⅰおよび調査Ⅱで得られた結果を改めて整理し考察した上で、仲間どうしの相互受容的態度を導く教師の援助のあり方を、練習過程の中で、どの行事・どの学年にも共通して現れる危機的状況への強い介入とその後の見守りを中心に考察している。

第8章では、研究全体を総括するとともに、今後の研究課題を整理している。

以上のように、年間を通した長期の調査を3年間に渡って学年を変えて実施するという丁寧な方法によって得られた結果は学術的に価値が高く、さらに、学校行事を通した相互受容（他者尊重）とSS発揮との関連性への着目は独創性があり、加えて、この関係性が学年の進行に伴って（縦断研究ではないものの）発達していくことを明らかにした点は当該領域に新たな知見をもたらしたと言える。

こうした点を踏まえて、本審査委員会は、学位請求者である中川優子氏には博士（教育学）の学位を取得する資格があることを、全会一致で認めるという結論に至った。

なお、学位申請者は、本研究にかかわる下記の審査付き論文を発表しており、博士学位申請の基本的要件を満たしている。

- ◆中川優子（2018）中学生が認知する養育者の態度と中学生の内的作業モデルとそのソーシャル・スキルとの関連性 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要 第8巻 第2号 85-92
- ◆中川優子（2018）中学校行事に取り組む過程で生じる生徒の変容と中学校教師による援助－生徒間のかかわり・クラスの様子・他尊感情に着目して－ 応用教育心理学研究 第34巻 第1号（通巻第48号） 27-40